Suttanipāta における saññā

中 谷 英 明

1. Suttanipāta I 層における saññā: 「認識」

(1) パーリ聖典の 3 層

Wilhelm Geiger 『パーリ文学と文法』はパーリ聖典の言語に 4 段階の発展が認められるという。それは古いものから順に、1) Gāthā 言語、2) 聖典の散文言語、3) 蔵外典籍の後代散文言語、4) 言語的混淆を呈する後代韻文、である。筆者は先に、Gāthā 言語の韻文中により古い特徴を有する一群の韻文を見出してこれを区別し、初期 2 段階の聖典言語が実は 3 層（古いものから I 層、II 層、III 層と呼ぶ）から成ること、Geiger が考慮しなかった韻律、伝承状況、語彙、思想もこの 3 層構造に一致することを明らかにした¹⁾。

本論文は saññā の意味を、I 層すなわち Suttanipāta (Sn) の Aṭṭhaka-vagga (八頌品^{はちじゅ}), Pārāyana-vagga (到彼岸品) 及び II 層を中心に考察する。本論中に言及する語彙の出現詩節番号は Paramatthajyotikā 第 3 巻所収の Sn 語彙索引によって確認頂きたい。

(2) 779 と 886 の saññā

779 は saññā を知ることによって次の事が起こると言う。

779. *saññaṃ pariññā vitareyya oghaṃ pariggahesu muni n'opalitto*
abbūhasallo caram appamatto nāsiṃsati lokam imaṃ paraṇ ca
 saññā をあまねく知って、奔流を渡りなさい。聖者は種々の所有物に執着することはない。矢を引き抜いて、不放縦のままに生き、この世もあの世も希求しない。

奔流 (ogha) は、後代には欲、有、見、無明の四流が区別されるが、八頌品では欲望の対象を指す。所有物 (pariggaha) は「受用すること」の意味で Pāṇini 文典に見え (1.4.65)、八頌品では、認識対象をその価値を認めて受け入れ所有する意識ないしは所有されるものを意味すると考えられる。本詩を含む Guhaṭṭhaka-sutta (772-779) は、862-874 と呼応する詩節が多く、この詩が 874 に対応するなら、

「矢」は papañca (潜在欲求) を比喩することになる。saññā を知ることによって欲望の対象を離れ潜在欲求を払拭できる、というのが本詩の主旨であろう。

886. na h'eva saccāni bahūni nānā aññatra saññāya niccāni loke

takkañ ca diṭṭhiṣu pakappayitvā saccam musā ti dvaya-dhammam āhu

世において多数の、それぞれ別の恒常の真理はない。在るのは saññā のみ。人々は諸々の体験知に基づいて憶測を作りあげ、これは真、これは偽という二元論を語る。

「体験知」と訳した diṭṭhi は、語根「見る」に接尾辞 -ti が付加された名詞である。同じ語根の過去分詞 diṭṭha 「見られたこと」は、しばしば suta- 「聞かれたこと」、muta- 「思われたこと」と共に列挙される²⁾。重要な知識は書写に依らず口承した古代インドにあって「聞く」ことはほとんど唯一の知識獲得の手段であったと考えられ (Veda 聖典が Śruti と呼ばれることを想起されたい)、他方「見る」ことは個人的体験であり、それを今日のように映像として伝える手段はないに等しかった。「見られたこと」と「聞かれたこと」はこのように異なっていたのであり、それぞれ今日の言葉で言えばほぼ「体験」、「知識」に相当するであろう。接尾辞 -ti は、-tu と対照的な意味を有し、-tu が動作の趨勢、潜在能力、主観性を表すのに対して、-ti は実行された動作、現実性、具体物を表す³⁾。diṭṭhi は従って、個々の具体的体験を集成した知として、学習知である suti と対比されるものであろう⁴⁾。

このように 886 は、人々の言う「真理」は個人的体験に基づいた憶測に過ぎず、恒常的に存在するのは saññā のみであると言う。

(3) saññā とは何か

では、それを知ることによって欲望の対象から脱却し、潜在欲求を払拭できるもの、体験知に基づく「真理」ではなく、恒常的に存在するものとは何か。

後に見るように、II 層において saññā は「想念」という意味を持つに至る。このような「想念」の自覚によっても、欲望脱却、自我意識払拭はあり得よう。しかしそれは、人に常在するものではなからう。

人が常に持つものは「意識」であるとも考えられる。しかし感覚の質、感情、想念、規範意識、人格を含む「意識」の総体は、八頌品においては dhamma によって表現される (【中谷 2011b】)。同じものが 2 語によって表わされる理由は見出し難い。

「認識」であれば、人が生きる限り常在するものである。身体からの情報である感覚、それから構成される知覚、知覚をもとに記憶を介在させて意味付けを行う判断などのすべてを包摂する心作用、しかも「真理」のような固定的獲得物で

はなく、可變的・心作用として「認識」を定義するならば、779 と 886 が言う saññā に最も相応しいと言えよう。このように「認識」を定義した場合、八頌品における saññā をこのような「認識」と解し得るか否かを以下に検討する。

(4) saññā における執着・錯乱と妄想

792. sayam samādāya vatāni jantu   uccāvacam gacchati saññā-satto

vidvā ca vedehi samecca dhammaṃ   na uccāvacam gacchati bhūripaṇṇo

saññā において執着のある人は自ら信条を立てておきながら右往左往する。しかし豊かな知性をもつ知者は明知によって生き方を確立し、右往左往することはない。

「知性」と訳したのは paññā, 梵語 prajñā である⁵⁾。Śatapatha Brāhmaṇa (ŚBr) は prajñā が dharma (規範) を与えると言う。svādhyāya (ヴェーダ学習) によって「prajñā は増大し、家門の存続、礼節、名誉、人々の育成、という四種の dharma をバラモンに付与する」⁶⁾「豊かな paññā を備える人が生き方 (dhamma) を確立する」と述べる本詩は、この考え方を継承すると言える。生き方の定まらない、「saññā において執着のある人」はこのように、モラルを確立した豊かな知性の人と対比される。

847. saññāvirattassa na santi ganthā   paññā-vimuttassa na santi mohā

saññañ ca diṭṭhiñ ca ye aggahesum   te ghaṭṭayantā vicaranti loke

saññā において錯乱を起こさない人に拘束はない。知性によって解放された人に妄想はない。しかし saññā や体験知に固執した人々は、この世において（自分も人も）傷つけつつ生きる。

冒頭の複合語後分には (saññā-)aviratta- と欠性辞 a- を読む。その名詞形 virāga は、II 層では用例すべてが「(欲望から) ところを離す」というプラス価値行為を表すが、八頌品ではこの語及び関連語形はすべて棄却すべきマイナス価値行為を表す⁷⁾。Pāṇini が virāga を「いらつき、動揺」という意味で使うことを考慮し⁸⁾、ここにその意味を認めて「錯乱していない人」と解し得よう。

saññā における錯乱の無い人とは、知性によって潜在欲求から解放されているがゆえに saññā (認識) の乱れ、妄想 moha が無い人である。他方、saññā (認識) や体験知に固執する人は（自分も人も）傷つけつつ生きると言われる。

次の 802 も、体験知に執着しない人は歪んだ saññā がないと言う。

802. tassidha diṭṭhe va sute mute vā   pakappitā n' atthi añū pi saññā

taṃ brāhmaṇaṃ diṭṭhim anādiyānaṃ   kenidha lokasmiṃ vikappayeyya

その人はこの世において、体験 (見たこと), 知識 (聞いたこと), あるいは思索

(228)

Suttanipāta における saññā (中 谷)

(思ったこと)において妄作された saññā が微塵もない。体験知にとらわれないそのバラモンを、何がこの世において妄想させることができようか。

(5) あるべき saññā のあり方

ここまで見た詩節では、saññā は謂わば否定的文脈で語られていた。次の詩節では、あるべきあり方の saññā が端的に語られる。

841. diṭṭhiñ ca nissāya anupucchamāno   samuggahītesu pamoham āgā
ito ca nāddakkhi aṇum pi saññam   tasmā tuvaṃ momuhato dahāsi

実にあなたは(自分の)体験知に依拠して尋ねているが、いろいろの固執に基づいて誤謬に至ってしまっている。であるから(私の) saññā は、ほんの僅かもあなたには見えなかった。そのゆえに、あなたは(それを)誤りと見なすのである。

874. na sañña-saññī na visañña-saññī   no pi asaññī na vibhūta-saññī
evaṃ sametassa vibhoti rūpaṃ   saññā-nidānā hi papañca-samkhā

saññā を saññā している人ではなく、saññā でないものを saññā している人ではなく、saññā していない人でもなく、消え去ったものを saññā している人ではない人、このような境地に至った人に個物は消え去る。「可熟物」と呼ばれるものは、実に saññā (のあり方) に応じて存在する。

既成の認識を認識するのではなく、認識とは異なるものを認識するのではなく、既に無いものを在るものと認識するのではなく、また認識していないわけでもない、そのように認識することになった人には「個物は消失する」、すなわち世界がまったく異なってしまう。認識がそのような特殊なあり方となった時、papañca も消える⁹⁾。

「可熟物」papañca は、「自我意識」(916)の根源であり、「心臓に突き刺さった見え難い矢」であり(779, 938),「この矢が突刺さった人はあらゆる方角に走りまわる。この矢を抜けば、走りもせず、坐り込みもしない」(939)と描写され、「潜在欲求」として認識のあり方を決める潜在欲求である。一般の人はそれに支配された体験知に基づいて憶測を作り、それを真理と思い込んでいるから、然るべき saññā が見えない。しかし saññā が papañca の制御を脱した時、世界は一変するのである。

以上が saññā についての八頌品の全用例である。いずれも「認識」と理解される。しかし「想念」という意味では、とりわけ 874 詩の解釈が困難であろう。

(6) 到彼岸品における saññā

到彼岸品は八頌品より制作年代が遅いことをうかがわせるものの、I 層テキストと見なされる。到彼岸品には次の 2 詩に saññā が現れる。

1113. vibhūta-rūpa-saññissa sabba-kāya-pahāyino

ajjhatañ ca bahiddhā ca n'atthi kiñci ti passato

ñāṇaṃ sakkānupucchāmi kathaṃ neyyo tathāvidho

個物が消滅した saññā を持つ人, あらゆるものを棄てた人, 心中にも, 外界にも, 何もないと見ている人, サッカよ, そういう人の知を私は尋ねます. このような人は何によって導かれますか.

「個物が消滅した saññā を持つ人」は, 上記 874 の「個物の消滅」を受けた表現である. その人は「あらゆるものを棄てた人」, 「心中にも外界にも何もないと見ている人」と言われる. 874 の「個物の消滅」は「世界が全く異なって現れること」を表現すると考えられるが, ここでは「執着の対象の消滅」と理解している. モノと意識の一切を捨離するというこの思想は, 八頌品では明示的に表明されないが, 到彼岸品では「無一物 (行)」(akiñcana / ākiñcañña) という言葉を用いて次の詩を含む 8 詩に記述される¹⁰⁾.

1072. sabbesu kāmesu yo vīta-rāgo

ākiñcaññaṃ nissito hitva-m-aññaṃ

saññā-vimokhe parame vimutto

tiṭṭheyya so tattha anānuyāyī

あらゆる欲望の対象に対する貪りの感情を捨て, 無一物行を実践し, そのこと以外のことを捨てた人, saññā における最高の解放において解放された人, その人は(欲望の対象を) 追い求めることがない.

このように到彼岸品における saññā は 2 例とも「無一物行」と関連付けられており, 八頌品の理解とは若干の相違を呈するが, 意味は「認識」であろう.

2. II 層における saññā: 「想念」

(1) Sn II 層における 5 例の saññā

148. na paro paraṃ nikubbetha

nātimaññetha katthacināṃ kañci

vyārosanā paṭigha-saññā

nāññaṃaññassa dukkham iccheyya

人は互いに辱め合ってはならない. 何に対しても誰に対しても傲慢であってはならない. 害意の saññā に駆られた怒りによって互いに苦しみを望み合ってはならない.

動詞 ati-man は「軽蔑する」とも取れるが, 軽蔑は怒りや憎悪を伴わないこともあるから, ŚBr に見える¹¹⁾「傲慢である」という攻撃的な意味の方がふさわしい. 同じ理由で ni-kṛ に関しても, Paramtthajyotikā は「騙す」と注するが, Ṛg-veda 以来の用例がある「辱める」であろう¹²⁾.

175. virato kāma-saññāya

sabba-saṃyojanātigo

(230)

Suttanipāta における saññā (中 谷)

nandī-bhava-parikkhīṇo so gambhīre na sīdati

欲望の saññā を止め、あらゆる束縛を超越した人、欲楽の生存を解消した人、その人は深みに沈まない。

kāma-saññā 「愛着の saññā」を止めた人は欲望の対象に縛られないから、「束縛を超え」ており、欲楽追求の生き方を解消している。

535. chetvā āsavāni ālayāni vidvā so na upeti gabbha-seyyaṃ

saññāṃ tividhaṃ panujja paṃkaṃ kappan n' eti tam āhu ariyo ti

(欲望) 放出と (欲望) 蓄積を断ち、よく知り、母の胎に入らない人、泥である三種の saññā を払拭して妄想を持たない人、その人を高潔な人という。

āsava は、Atharva-veda (AV) では出血・下痢等に見られる「流出」を意味し、医学書では「下痢」であるが¹³⁾、他方で「流入」と解し得る文脈も少なくない。しかし「流入」の用例は八頌品より後代の印象があり、また八頌品が AV を知っていた形跡もあるので¹⁴⁾、II 層の本詩でも「(欲望) 放出」が妥当であろうか。三種の saññā は先に見た欲望と憎悪の saññā を含むと見てよいであろう¹⁵⁾。

732. etam ādīnavam ñatvā dukkhaṃ saṃkhāra-paccayā

sabba-saṃkhāra-samathā saññāya uparodhanā

evaṃ dukkha-kkayo hoti etam ñatvā yathā tathaṃ

733. sammad-dasā vedaguno samma-d-aññāya paṇḍitā

abhibhuyya māra-saṃyogaṃ nāgacchanti punabbhavan

苦は計らいによって生じるといふこの厄災を知って、あらゆる計らいの静止から、(また) saññā の停止から、こうして苦が消滅する。これをあるがままに知って正しくものを見、博識である賢者たちは、正しい知によって、魔王の桎梏を克服して、次の生へとは至ることがない。

saṃkhāra は欲望実現を図る心的性向、「利己的計らい」と言えようか。苦の解消には saṃkhāra と saññā の払拭が必要であると言う。

次の例は少し趣を異にし、saññā の文法用語の意味と仏教用語の意味を並置するように見える。Pāṇini (1.2.53) は saṃjñā を「(協約的・専門的) 名辞」という意味で使う。c 行冒頭の saññā はこの意味であろうか。

538. yāni ca tīṇi yāni ca saṭṭhi samaṇa-ppavāda-sitāni bhūri-pañña

saññakkhara-sañña-nissitāni osaraṇāni vineyya oghatam' agā

六十と三の沙門の見解に依拠した、名辞・音節・saññā に依拠した謬見を退け、豊かな知性の方よ、あなたは暴流の闇を超えられた。

(2) II 層における saññā の意味

I 層において覚者のものと一般人のものの 2 種が区別された saññā「認識」は、II 層ではその大多数が欲望・憎悪等の「想念」として「棄却すべき」という否定的文脈で現れる。これは「人は五蘊という重荷を負う者であり、それを降ろせば楽になる」(SN Vol.3, p.26 韻文)と言われる、II 層で初めて現れる「五蘊」と無縁ではなかろう。「対象」rūpa, 「感覚」vedanā, 「計らい」saṃkhāra, 「判断」viññāna ととともに五蘊の一蘊となった saññā は、かつての「認識」という広い意味を棄て、「感覚」と「計らい」の間に位置する「想念」となったと考えられる。

他方で同じ II 層の Theragāthā (= Th) の「ブッダにある saññā」(217) や「非想処, 無想処」(259; 韻律 Rathoddhatā¹⁶⁾) という表現の saññā は I 層の用法を僅かに受け継ぐものとして「認識」と解すべきであろう。

付言すれば、III 層の saññā も II 層と変わらない。「五蘊」の語は五取蘊を「有漏の五蘊」と説明する一カ所 (SN Vol.3, p.47) に現れるのみであり、ほかでは常に五取蘊と言われ、従って saññā は捨棄の対象である。他方で小空経等の「非想非非想処」は Th 259 を継ぐ表現であろう。

-
- 1) 【中谷 2003】、【中谷 2011a】、【中谷 2011b】参照。 2) 790, 793, 797, 798, 813, 887, 901, 914 参照。 3) Emile Benveniste, *Noms d'agent et noms d'action en Indo-Européen*. Paris, 1975, pp. 87 ff. 参照。 4) 八頌品において diṭṭhi が、それに依拠してはならないという否定的文脈でしか現れないことは【中谷 2011a】に指摘した。 5) paññā は八頌品では全 9 カ所のうち 5 カ所で「劣った paññā」という表現が現れ、「叡智」などの訳はふさわしくないから中性的な「知性」という訳を当てた。 6) athātaḥ svādhyāyaprasaṃsā ... prajñā vārdhamānā catūro dhārmān brāhmaṇām abhinīṣpādayati brāhmaṇyam pratirūpacaryāṃ yāso lokapaktim. (ŚBr 11.5.7.1.) 7) 795, 813, 847, 853. 8) vā citta-virāge (6.4.91) 「(動詞が) ころの動揺 (virāga) を表すとき、(母音 ū は) 時に (doṣ- 語幹の語末から第 2 番目の音節 o に代わり得る)」。 9) この詩の解釈は【中谷 2011a】に論じた。ただし saññā-nidānā の解釈を bahu-vrīhi に改め、今回の訳のように解する。それは 873 で問われた問い、「sukhaṃ dukkhaṃ はいかにして消え去るか」への答えとなっている (sukhaṃ dukkhaṃ は 874 では papañca と言い換えられる)。 10) 1059, 1063, 1070, 1071, 1072, 1091, 1094, 1115. の 8 詩に見える。 11) 神々と抗争していた時、アスラたちは傲慢心から自分たちの口に供儀を行い、その傲慢心の故に滅んだと述べた後、「したがって傲慢であってはならない」(tāsmān nātīmāyeta) と ŚBr は言う (5.1.1.1.). 12) 例えば次の例。「(汝の) 讃歌において、歌人よ、われらに好意を示せ。人のあいだにわれらを貶すことなかれ。」(辻訳) RV 3.33.8cd ukthēsu karo prāti no juṣasva mā no nī kaḥ puruṣatrá nāmas te. 13) AV (Śaunaka 版) 2,3.4-5. 他には Āpastamba-dharmasūtra 5. 19 等。āśrava の用例は榎本文雄「āśrava について」『印度

(232)

Suttanipāta における saññā (中 谷)

学仏教学研究』27 (1), 1978 に詳しい。 14) 例えば「水が破れ船に（襲いかかる）ように」（779d: *nāvaṃ bhinnam ivodakaṃ*）は AVŚ 5,19.8b に同じ句が見える。あるいは *yakṣa* の「靈魂」という意味での使用（876: AVŚ 10,2.32; *yakṣa* に関しては Louis Renou, “Etudes Védiques et Pāṇinéennes,” Tome 7, p.51 & p. 58 参照）などがある。 15) 中村元『ブッダのことば』は、欲想、恚想、害想の三であろうと推定している。 16) この箇所を *n’eva-asaññisu* と読んで「非想非非想処」と解することは韻律上不可である。

〈参考文献〉

【中谷 2011a】: 中谷英明「潜在自我意識 (*papañca*) と認識 (*saññā*) の転換—*Aṭṭhakavagga* の記述による—」『印度学仏教学研究』第 59 巻 2 号, 平成 23 年 3 月, pp. 868–859.

【中谷 2011b】: Hideaki NAKATANI, ‘Buddha’s scheme for forming noble-minded generalists in society,’ *Social Science Information*, 50-1, pp. 81–103. Maison des sciences de l’homme, Paris, March 2011.

【中谷 2011c】: Hideaki NAKATANI, ‘Introduction: In search of a generalized science of humanity,’ *Social Science Information*, 50-1, pp. 5–24. Maison des sciences de l’homme, Paris, March 2011. Cf. <http://ssi.sagepub.com/content/50/1.toc>

【中谷 2003】: 中谷英明「ブッダの魂論」特定領域研究「古典学の再構築」『論集「古典の世界像」』。pp. 32–50, 神戸, 平成 15 年 3 月。

〈キーワード〉 ブッダ, *saññā*, *saṃjñā*, 五蘊, *Aṭṭhaka-vagga*, *Suttanipāta*, 認識, 想念, *diṭṭhi*, *paññā*, *Pārāyana-vagga*

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授, Ph. D.)